

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 35 2014. 12

\*\*\*\*\*

## 特別寄稿

木原 均先生小伝 ～研究と探検とスポーツと～ ⑥ (完) 研究者の顔 その3 木原 ゆり子	1
北大あれこれ 第2回	
松村松年先生ゆかりの建物 久万田 敏夫	4
博物館訪問	
ニッカウスキー工場、博物館見聞記 船迫 吉江	5
活動報告	
市川信一郎先生と北大ポプラチェンバロ 雪田 理菜子	6
『学船 洋上のキャンパスおしよる丸』展 岩崎 峻・江口 剛・雲中 慧・山内 彩加林	7
10年目を迎える平成遠友夜学校 藤田 正一	8
平成遠友夜学校 10周年記念式典 江川 美奈子	9
遠友夜学校の教育精神を未来へ 山口 佳三	10
町はずれの学舎で脈打つ熱い血潮 小山田 伸明	11
ポプリコンサー 山岸 博子	12

## 特別寄稿

### 木原 均先生小伝\* ～研究と探検とスポーツと～ ⑥ (完) 研究者の顔 その3

木原 ゆり子

#### 横浜から新たなスタート

33年暮らした京都から木原生物学研究所とともに引っ越した横浜の新天地は、電気も水道もガスもない過疎地だった。東海道の保土ヶ谷と戸塚の中間に位置する富士を望む丘陵地帯である。敷地内の立木を提供して電柱を立て、1キロ離れたところから電線と電話線を引き、水は丘の下からモーターで汲み上げて頂上のタンクに貯め、研究所の施設や圃場や所員の住宅にパイプを敷いて分配した。交通の便は悪かったが、敷地も建物も格段に広くなり、設備も充実して研究活動は活気づいた。

所員は多士済々。名刺一枚の紹介で研究員になった人や突然訪ねて来た見知らぬ青年がそのままスタッフになるという即断即決ぶりであった。

「inbreeding\*\*はよろしくない」というのが父の持論だったので、出身校や履歴書にとらわれるこ

とがなかった。

横浜移転の翌年(1956)には、日本初の国際遺伝学会が東京と京都で開催されて議長を務めた。竣工したばかりの木原生物学研究所にも国内外 120名の遺伝学者が集まり、タネナシスイカの試食で大いに賑わった。

しかし、移転後わずか数年で、周辺の状況は一変する。近隣の丘は削られて大団地になり、谷は次々に埋められて住宅地となった。林も野原も畑地も消え、餌場を失ったスズメが大挙して研究用のコムギやオオムギを襲うようになり、圃場全体に防雀網を張らなければならなくなった。急激に都市化する環境では農作を伴う研究継続は難しくなっていく。

1969(昭和44)年には、三島に研究所の分室を建てて圃場を借り、翌年には横浜の敷地の7割と

\* タイトル「木原 均先生小伝」は編集委員会による。写真はすべて木原ゆり子氏所蔵

\*\* inbreeding: 近親[同系]交配、同族・縁故(者)優先

研究施設を横浜市に売却して研究の存続を図ったが、財団法人の運営は厳しかった。1978 (昭和 53) 年には三島分室をたたんで横浜に統合。規模は縮小したが、父は「世界一小さい研究所」と称して意気軒昂であった。

### 箱根の自然を守る

三島の遺伝学研究所に在任中、三島から近い箱根の自然に関心を寄せ、芦ノ湖の逆さ杉や仙石原の埋れ木の枯死年代の調査、植物相の変遷や樹木の調査を始めた。特にヤマボウシの花の美しさに魅せられて、花の変異の研究を始めるとともに「山法師を見る会」を作って、作家や画家などさまざまな分野の方々と毎年花見を楽しんだ。

箱根芦ノ湖の西岸は国有林だが、東岸は一企業の所有地であった。時は、日本中でゴルフ場建設のブームである。日本では他に類を見ない箱根のヤマボウシの原生林が次々に伐採されて、ゴルフ場に変えられようとしていた。この地域のかげがえのない自然が失われて行くことを目の当たりにして、小熊 悞博士 (元北大低温科学研究所所長、元国立遺伝学研究所所長) と茅誠司博士 (元北大理学部教授、元東京大学総長) に呼びかけ、「箱根を守る会」を始めた。「もう手遅れだ」と忠告する人もあったが、「仮にそうであっても、瀕死の重病患者に万全の医療を尽くすように、箱根を守りたいと思う。」と言って東奔西走していた。

紆余曲折はあったが、運動の甲斐があつてヤマボウシの原生林は守られ、「箱根樹木園」が誕生した。しかし、現在、その区域の自然はかなり残されているものの、「九頭龍の森」と名を変え、目的も雰囲気も異なる観光地となっている。

### 遺伝学・進化学から博物学へ

もう一つ日々の暮らしの中で楽しんでいた実験があった。研究施設も高価な機器も要らないルーペとノートと鉛筆があれば誰でもできる「小さい実験」である。

日常生活の中でふと疑問に思ったことに目を留め、観察・記録・実験を続けていると思いがけない結果や発見につながることもある。この不思議発見と謎解きが父の日課であり、お楽しみものゲー



ヤマボウシを手に (箱根にて 1970 年代)

ムであった。

「小さい実験」は数々試みたが、最も熱中したのは左右性の研究である。若い頃、コムギが芽生える時の葉鞘に、右巻き・左巻きがあることに気づいたのが発端で、植物の蔓の右巻き・左巻きから神社の縄の右巻き・左巻き、絵画に描かれたあらゆる螺旋に至るまで、左右性の追究はとどまることがなかった。また、植物のオス・メスに関する雌雄性の研究などにも取り組み、関心はいずれも博物学的領域に及んだ。

植物の世界では、古今東西を問わず、右巻き・左巻きの定義が決まっていないことから、父は「アサガオの蔓を右巻き、ホップの蔓を左巻きと呼ぼう！そうすれば、リンネの用語に一致するばかりでなく動物学、物理学、化学の螺旋に対する呼称と一致する。」(1980)と呼びかけた。今ではこの定義が主流になりつつあるようである。

こうした実験の一部は、神奈川県の高校の生物の先生方と『私の生物学—小さい実験—』(講談社 1979)にまとめたが、結びに「生物学的教養のすすめ」と題して次のように述べている。

「かつて旧制中学では“博物学”という学科があった。現在、博物という言葉は博物館にしか残っていないが、“総合的な自然科学”といった意味に解してよいだろう。それがその後、生物学・化学・物理学へ分かれ、さらに専門の学界では分子生物学とか高エネルギー物理、高分子化学というように細分化してきた。それは学問の進歩に従う自然の流れであり、細分化により速やかな進歩が成し遂げられた。しかし、近年、余りにも細分化された結果、総合的な見方に欠けるという反省か

ら“学際的研究”の必要性が強調されている。

これは言葉は違え、かつての博物学の精神に共通するものである。一方、環境悪化の結果として、エコロジー、生態学的考えの必要性が強調されている。地球上の生命は互いに関係し、影響しあいながらこの地球上の環境を形作り、そこで生きているからいろいろな要素のからみ合いを重視しなければならないというのである。これも博物学の考えに似ている。(中略)植物や動物を観察することは、対象となるものだけでなく、他の生物や自然環境とのかかわり合いを見ることになる。つまり、『小さい実験』をすることは、博物学的な教養を養うことになる。文学・美術・音楽・・・など現代人には教養が必要とよく言われる。それならば、“生物学的教養”があってもよいのではないだろうか。『小さい実験』が、そのためにも役立ってほしい。」

#### 再び北の大地から

1976(昭和51)年、北大創基100周年記念事業の一つである国際学術講演会で、「生命科学の現代的使命」と題して講演を行なった。生命科学が台頭してきたばかりの時期で、食糧、環境、人口など人類の未来に関する危機と生命科学の役割について語った。最後に地球は人間だけのものではなく、全ての生物がここで生を営んでいること、他の生物なしに人間は生きることができないことを述べ、「医師が人類の病気を予防したり、治療するように、生命科学は地球の医師となって働いてほしいものです。」と結んだ。

研究者として父の足跡を振り返ると、札幌時代は創生期、京都時代はゲノム分析時代、横浜・三島時代は細胞質研究の時代となる。

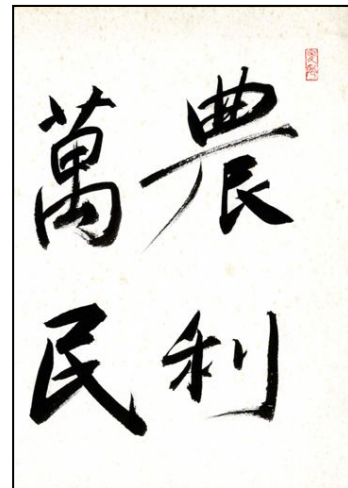
長年、遺伝学の基礎研究に従事してきたが、常々研究成果が応用面にまで発展することが重要だと考えていたので、1978(昭和53)年から再び北海道に拠点を置いて新たなテーマに取り組んだ。北大、帯広畜産大学、北海道農業試験場、東北農業試験場、全農グループ等の協力でコムギの共同研究プロジェクトを立ち上げ、核と細胞質の間のヘテロシス(雑種強勢)が作物の品種改良に役立つ

かどうかの研究を始めた。そのために1983(昭和58)年までの5年間、夏は帯広で過ごした。そして、冬は1979(昭和54)～1982(昭和57)年まで、英文の研究自伝“WHEAT STUDIES”-RETROSPECT AND PROSPECTS-(KODANSHA/ELSEVIER, 1982)を書き上げるためにハワイで過ごした。

1983(昭和58)年、国際小麦遺伝学シンポジウムが京都で開催されて特別講演を行なった。自ら提唱したシンポジウムが25年目にして初めて日本で開かれたのだが、これが生涯最後の講演となった。タイトルは「ダルマ小麦の起原と歴史」である。

1960年代に「緑の革命」と呼ばれる世界の食糧事情を救った画期的なコムギの品種改良があった。それは日本の「小麦農林10号」という矮性多収穫品種の貢献によるものだったが、世界のコムギを一変させた背の低い(矮性)遺伝子は、古く関東一円で栽培されて来た「ダルマ小麦」(高さ約60cm)に由来することを探るものだった。

1984(昭和59)年、財団法人木原生物学研究所を解散し、横浜市立大学へ移管した。その2年後、1986(昭和61)年7月27日永眠。満92歳であった。(完)



「農利萬民」とは、農業は萬民に利するという意味で、アイオワ州立大学農学研究室にあった下記の言葉を、父が「自己流に意識」したものだ。

“Agronomy feeds the World”

色紙に書き始めたものの余白がなくなって、落款印が押せず、引首印「麥秀」(麦の穂の意)のみになった失敗作ですが、書体に勢いがあるのでお目に掛けます。

## 第2回 松村松年先生ゆかりの建物

昆虫ボランティア 久万田 敏夫

### 旧昆虫学・養蚕学教室の前景

1901(明治34)年に建設された表記の建物は、松村先生が主に研究された部屋が内部にあり、学生達もここで勉学にはげんだ。かってここで学んだ高野秀三先生が、「僕等が卒業の時に記念写真をとったエルムの木がここにある」と云っておられた。その先生ももう亡くなられ、ここで学んだ人達はもう居ない。戦前に本確的な農学部が建てられた時に昆虫学教室は移動し、長らく使われていなかった。



### 当時の昆虫標本棚と標本箱

松村先生に使用された昆虫標本を納める標本箱は、底に障子を張ったあげ底をそなえ、それに標本針がささっている。当時西洋ではコルク張りが主流であったが、日本では高価なため、和紙を利用したかつきの松村先生考案の箱で、永く昆虫学教室で使用されて来た。今では新しい標本箱に変っている。



### 旧昆虫標本室

この石造りの倉庫風の建物は、旧昆虫学教室の裏に独立して建っていて、その来歴を知る人は少ない。かつては旧昆虫学教室の建物と廊下でつながった建物で、1927(昭和2)年昆虫標本を納めるために建てられた札幌軟石の標本庫である。この不燃の建物を見て松村先生がやっと安堵したと云う話が伝わっている。昆虫標本を大切に、第2次世界大戦下でも守って来た先生の姿がしのばれる。



### 旧松村松年邸宅

北大の南門を出たすぐの所に、1903(明治36)年に松村松年先生が建てて住んだ建物がある。以前は北大の官舎があった後地であるといわれている。現在では「ぶあいそ 別邸」として使用されているが、入ってみると天井の低い簡素な造りである。ここから研究室まで、毎日ステッキをふりまわしながら通った先生の姿を想像すると、思わずにやりとしてしまう。



## 博物館訪問

## ニッカウイスキー工場、博物館見聞記

植物ボランティア 船迫 吉江

*King of Blenders*

連休明けの10月14日(火)図書、昆虫、きのこ、植物、化石などのボランティア16名が参加。生憎、朝から雨模様。久振りに現役通勤者の人波をすりぬけながら札幌から余市駅に向かう。不便なことに直通電車が無い。周りの秋景色を眺めながら車中でのお喋りが続く。直通電車が無いのは戦後のGHQの策略らいし等々、日常のあれこれを話し合っているうちに余市駅に到着。

駅前広場に「政孝とリタ通り」の碑があり、通りのつきあたりがニッカウイスキーの正門。此处は製造工程、博物館、試飲棟、レストラン、売店からなる広大な施設でした。この工場一帯の地質調査をされた方が化石の寺西さんだそうです。

製造工程で特記すべき事は蒸溜方法が世界でもまれな石炭直火蒸溜法でモルトが作られているという事です。そして石炭は中国、インドネシアからの輸入炭だそうです。外に出ると旧事務所があり脇に「日本果汁株式会社」と表示されており、この日と果を取ってニッカと命名されたそうです。ニッカと言えりんごの印象が強くりんごでモルトを作っていると錯覚していました。が原酒の熟成を待ち続けるためのジュース製造というお話がありました。博物館内は政孝とリタをはじめ、人々の英知が注がれた軌跡を余す所なく展示されていました。

特に私が興味深く拝見したのは、「ブラックニッカ」のラベルの原画、板画など様々な商品のラベ

ルについてでした。これらはどれも洗練された優雅なものばかりでしたが、中でも断トツの美しさで人を引きつけるラベルはやはり「髭のブラックニッカ」でした。ウイスキーを愛した政孝とリタの情熱と信念を支えた愛は信仰による礎があったからでは?とも思いました。

試飲棟ではジュース、ウイスキーを頂きお喋りしながら昼食を待ちました。食前の飲酒が昼食をいっそう美味しくしたようです。私は記念に小さな「竹鶴」を買いました。企業の博物館は至れり尽せりで明るく楽しい場所になっていました。2016年夏、北大博物館はどのようなリニューアルプランがあるのか楽しみにしたいです。世話人の沼田さんお疲れ様でした。

(イラストは筆者の船迫吉江さんが描かれたものです。)



ニッカウイスキー工場旧事務所前で記念撮影  
筆者は後列右から2人目

## 活動報告

## 市川信一郎先生と北大ポプラチェンバロ

ポプラチェンバロボランティア 雪田 理菜子

北大ポプラチェンバロの発案者、市川信一郎先生が亡くなってまる一年あまりが経過しました。北海道教育大学の教授でいらした市川先生の研究室を昨年の春卒業した私は、先生の最晩年の教え子ということになります。チェンバロのそばで先生に教を乞うた日々がまだ最近のことに思えます。

北大ポプラチェンバロは、市川先生がバッハの研究者だったため、バッハの鍵盤作品が全曲弾けることを前提に作られました。現代の通常のピアノの鍵盤数は88鍵ですが、ポプラチェンバロはたった56鍵です。ピアノでバッハの作品を弾くと沢山の鍵盤を余すので、「これしか使っていない」と思う人も多いようですが、チェンバロで弾くと、鍵盤を幅いっぱいを使って、バッハがいかに大胆に作曲したか一目瞭然になり、むしろそれは「こんなに使っている」という感覚です。また、チェンバロは強弱がつかない楽器ですが、音と音との細かな間合などでバッハ特有の作曲技法をより浮き彫りにできます。他にも、チェンバロの演奏でなければ見えてこないバッハの魅力は語りつくせぬほどあることを、市川先生は訴え続けていました。

昔先生が監修した「バッハはピアノが大嫌い」というNHKのテレビ番組があるのですが、先生はこの話が大好きでした。番組はバッハの遺産目録を調査しに行くところから始まるのですが、結論から言うと、バッハは生涯ピアノを所持しませんでした。ピアノ職人に試奏を頼まれ、その際に即興演奏をして生まれた名曲もあり、現に唯一ピアノのための曲として残っていますが、やはり自分の音楽に見合う楽器は絶対にチェンバロだと判断し、生涯チェンバロにこだわり続けたという話です。北大ポプラチェンバロは、バッハが楽譜に書いたことをシンプルに、そしてナチュラルに再現できる楽器になっていると思います。

市川先生は、プロのチェンバリストたちのリサ



プレゼントした帽子を喜んで被ってくれた市川先生  
2013年3月撮影

イタルの調律を担当するなど、調律にも造詣が深く、ポプラチェンバロでも色々な調律を試してみせてくれました。先生が調律する度、「バッハの平均律曲集を一番から順に弾いて、この調律が一番美しく聴こえる曲を見つけ出せ」など強行的なミッションを与えられ大変でしたが、今ではとても贅沢な経験をさせてもらったと思っています。その途中で先生に、「君は時間がかかるから喉が渴いた。飲み物を買ってきてくれ。」と言われるのですが、持たせられるお金にはいつも私の分の飲み物代も入っていて、優しさを感じました。先生はドイツに長く留学していたこともあり、ヨーロッパの紳士のような考え方の人で、お酒の席でも、女性にお酌や料理の取り分けを一切させませんでした。竹を割ったような性格で、人に遠慮や同情することなく、我が道を突き進んでいる先生はとても魅力的に映りました。君はこの先チェンバロを扱っていこうから、と教えられることすべてを教えようとしてくれた、私よりも必死な先生の姿に大きな愛を感じます。

市川先生の意思を継ぐためにも、これからも北大ポプラチェンバロを大切にしていきたいと思います。

## 『学船 洋上のキャンパスおしよる丸』展

北海道大学水産学部 海洋資源科学科 2年 岩崎 峻・江口 剛・雲中 慧  
増殖生命科学科 2年 山内 彩加林

「学船、出航！」2014年11月3日に幕を閉じた『学船 洋上のキャンパスおしよる丸』展は、5月20日に水産学部生による冒頭の合図で函館キャンパス水産科学館で開催し、7月11日から札幌キャンパス総合博物館に巡回した。札幌でのオープニングセレモニーはチェンバロボランティアの浅川広子さんによる『水産放浪歌』の演奏から始まった。『轟く雷鳴 握る舵輪』・・・洋上のキャンパスたるおしよる丸の映像とチェンバロの音色が流れる展示室で、『海・船イラスト募集』優秀賞の松原将隆さん（北海道教育大学）や、『学船』の命名者高尾祐太さん（北海道大学文学部）を交え、セレモニーは進められた。

展示解説には展示解説ボランティアの皆様と、私たちミュージアムマイスターコースの学生4名が対応した。寺西辰郎さん（地学・展示解説ボランティア）による『ロープワークワークショップ』では、展示室にロープやそれを括り付ける棒を用意し、ロープワークを実際に体験できる場を提供した。濱市宗一さん（展示解説ボランティア）発案の『イカ飛行機ワークショップ』では、おしよる丸IV世から撮影された「空飛ぶイカ」にちなみ、イカ飛行機を製作し、実際に飛ばしてもらうことができた。イカ飛行機ワークショップは子どもに人気だったのはもちろん、大人からも好評を得た。館内にはイカ飛行機を持ち歩く来館者の姿が目立ち、楽しい雰囲気が展示室のみならず博物館全体に広まった。ミュージアムマイスターコースの4名は全員水産学部の2年生で、普段の講義や、10月にあったおしよる丸V世での乗船実習での経験を生かした解説を行った。又、函館キャンパスで学ぶ3年生も1名ゲスト解説員として駆けつけ、毎日の講義や実験、臨海実習で得た水産学部生ならではの話題を提供した。

函館キャンパスで約2ヶ月、札幌キャンパスで約4ヶ月の、およそ半年開かれた『学船』展は、

ボランティアやミュージアムマイスターコース学生の協働の内に営まれた。湯浅万紀子先生・藤田良治先生をはじめとする総合博物館の先生方、ボランティアの皆様、ありがとうございました。



執筆したミュージアムマイスターコースの学生さん4名  
左から雲中さん、岩崎さん、山内さん、江口さん



おしよる丸展開催中の総合博物館正面の様子  
藤田良治先生撮影

## 10年目を迎える平成遠友夜学校

平成遠友夜学校校長 藤田 正一

2001年9月に北大125周年記念事業の一環として建設されることになった札幌市民と北大の交流の場・遠友学舎が完成した。切り妻の大屋根にガラス張りの壁という特徴ある建物だ。この建物の名は1894年に新渡戸稲造夫妻が私財をなげうって札幌の貧しい子供たちのために開いた無料の学校、札幌遠友夜学校に負っている。1894年から1944年までの50年間、札幌農学校／北大の学生たちが無償で先生役を引き受け、昼間の学業の後、札幌遠友夜学校で教鞭をとった。貧しい故に昼間学校に行きたくても行けずに働かなければならなかった青少年達が、仕事の後にこの夜学校で学んだ。若い北大生達と、さほど年の違わない生徒達がここで白熱を交わした。

当時を知る北大予科教師、蝦名賢造は遠友夜学校を評して次のように述べている。「新渡戸稲造夫妻の札幌に残したもっとも美しい、高貴な遺産の一粒は、このささやかな札幌遠友夜学校であった。それは新渡戸をふくむ札幌農学校全体の教育精神そのものの体現ともいふべきものであり、また逆に農学校全体にヒューマンイズムの精神を注入することにもなった。」

さて、2001年秋に「遠友学舎」という立派な建物は建ったが、その中で何も行われていない状態が続いた。これはもったいない。名前に相応しい社会への還元が望まれる。2002年4月、私は北大の歴史に詳しい山本玉樹先生にお願いして、札幌市民対象に「クラーク講座」を開設していただいた。そして2005年4月、私は自分の研究室の学生たちの協力を得て、「平成遠友夜学校」をスタートすることにした。新渡戸が開いた札幌遠友夜学校の精神を継承し、学生のボランティアと教員の無償の奉仕により成り立つ学校である。月曜の夜の「クラーク講座」はそのまま山本先生の主催の下に継続するため、開校は毎週火曜日の夜とした。この学校も今年で10年を迎える。平成遠友夜学校での講義は既に通算400回を超える。

夜学校の講師を務めてくれる人々は、北大の教員、大学院生、学生、芸術家、学生の部活やサークル等、多彩で、さすがに総合大学だけあって、話題のバリエーションは豊富だ。ときには受講生自身が講師となってくれることもある。

ここに通ってくる多くの生徒さんは私と同じかそれ以上の年齢の方が多いが、その熱意たるや若者の比では無い。演壇に立って感じる会場の雰囲気におもわず「なんだ、この熱気は」と漏らした北大教授もいた。当然、質問も多い。経営学を講義した学生に、「君、経営は人だよ」とコメントした経営の達人。学問的な知識を切り売りした学生もはっと息をのんだ。大学の講義では教わらない多くを先生役を務めてくれた学生が逆に生徒から学ぶ。

この遠友夜学校が、学生にとってボランティア精神や新渡戸及び札幌農学校の精神を実践的に学ぶ機会になるとともに、地域の人々の向上心に少しでも貢献し、大学の垣根を少しでも低く出来ればとも願っている。世話役をやってくれた「教頭先生」達も、遠友夜学校の精神を学び、それぞれの社会に巣立って行った。彼らはここでの経験を、就職や仕事に就いてからの責務遂行にも活かすことが出来ていると言う。この夏から始まる塾に通えない高校生支援も学生達の発想でスタートした。次の10年、遠友夜学校の精神を生かし、学生たちと何が出来るか考えたい。



平成遠友夜学校開講を紹介した北海道新聞 2005年4月20日



## 平成遠友夜学校 10 周年記念式典

北海道大学農学部森林科学科 4 年 平成遠友夜学校教頭 江川 美奈子

### 〔平成遠友夜学校とは〕

2005 年に平成遠友夜学校は開校しました。無料で講義を行っていた遠友夜学校の魂を受け継ぎ、平成遠友夜学校でも無料で講義を行っています。運営に携わる学生を教頭と呼び、北大の教授や学生が先生となって市民向けに毎週講義を行います。

### 〔平成遠友夜学校 10 周年記念式典〕

平成遠友夜学校が開校されて今年で 10 周年を迎えました。開校 10 周年を記念し、11 月 1 日に記念式典が行われ、4 つの記念講演が行われました。

#### 1. 『遠友魂の系譜』 藤田正一先生(平成遠友夜学校校長)

概要：北大と市民の接点をつくり、市民に大学で学んだことを還元するために平成遠友夜学校を開校。新渡戸稲造は貧しい子供たちに日本語の基礎を教えるために遠友夜学校を開校。平成遠友夜学校と遠友夜学校の成り立ちを振り返った。

#### 2. 『「遠友夜学校」から学ぶことなど～学校に行けない子どもたちをサポートするフリースクールの実践～』 亀貝一義先生(NPO 法人フリースクール札幌自由が丘学園理事長)

概要：私立高校の教師を通して、北海道の私立学校は遠友夜学校の精神を汲んでいることを知る。教師を辞め、学校に行きたいが足がむかない人のための学校(フリースクール)を設立。「学校はもっと多様であるべき」ということを主張、実現していく。

#### 3. 『人生の自己ベストを更新する～「経年優化」時代の平成遠友夜学校～』 尾崎由博先生(平成遠友夜学校初任教頭：現 JICA 職員)

概要：一生学び続ける時代が到来。平成遠友夜学校は多様な価値観や経験の場である。学びたい、知りたいを満たすことは昨日の自分よりも成長していくこと。ずっと頑張る続けることはできないので、短距離走ではなく長距離走で頑張っていく。

#### 4. 『平成の遠友夜学校』 小山田伸明先生(平成遠友夜学校現教頭：北大理学部 2 年)



藤田正一校長の講演

概要：今年から高校生向けの学習支援を平成遠友夜学校で始めた。きっかけは平成遠友夜学校と貧困問題。大学と市民、そして、高校生を繋ぐ。大学生も巻き込み、大学生の中にも何かを生みだしていきたい。

記念講演の後は講演者、北大現役 OBOG、市民が交わり、温かい雰囲気の中で懇親会が行われました。

### 〔これからの平成遠友夜学校〕

10 周年を機に、活動が広がっています。今年の 8 月上旬、約一週間苫前町の中高生に勉強を教えに行きました。9 月下旬から木曜日に遠友学舎での学習支援が始まりました。遠友夜学校の意志を継承し、継続を図ります。今後ともよろしくお願い致します。

平成遠友夜学校：毎週火曜日 18 時 30 分より、遠友学舎にて開校



懇親会の様子

## 遠友夜学校の教育精神を未来へ (平成遠友夜学校創設 10 周年記念誌「燈火」から転載)

北海道大学総長 山口 佳三

札幌農学校第 2 期生新渡戸稲造が札幌農学校教授時代に開校した遠友夜学校的意思を引き継ぎ、本学創基 125 周年記念事業で建設された遠友学舎において開校されている平成遠友夜学校が 10 周年を迎えると聞きました。誠にありがとうございます。

新渡戸稲造は、19 歳で札幌農学校を卒業後、1884 年から 7 年間アメリカとドイツに留学し、1891 年に帰国後すぐに 29 歳の若さで札幌農学校教授となりました。その同じ年に、新渡戸は札幌に中学校が無いことに鑑み、遠友夜学校の前身となる私立北鳴中学校を設立し、1893 年万里子夫人にアメリカの実家から届いた二千ドルを基に、現豊平橋近くの札幌独立教会附属日曜学校の敷地及び校舎を買い取り、1894 年遠友夜学校を設立し校長となりました。新渡戸 32 歳の年のことでした。

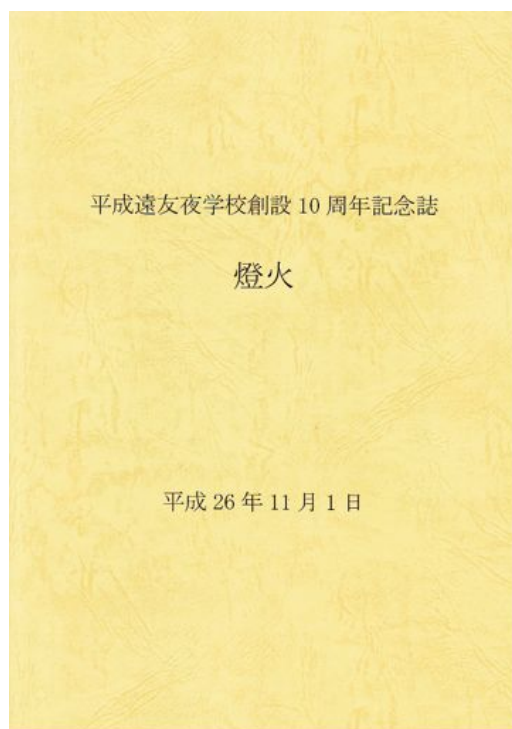
遠友夜学校は、授業料を徴収せず、教科書も無料配付、普通学その他、看護法、礼式、裁縫、編み物などの実用学に重点を置き、さらに、国民として恥ずかしくない趣味と常識と品性の涵養に力を注ぎました。当時の日本は近代化の途上にあり、貧富の差は著しく、ようやく社会事業の重要性が認識されようとした時期ではありましたが、その多くはまだ外国の宗教団体の手に任されていました。そのような時期に、新渡戸の企ては実に大きなものであったと思います。

そのような新渡戸の教育精神を引き継ぎ、平成遠友夜学校では、北海道大学に所属する学生や教職員により、基礎研究、教養科目や体験談など、現在における趣味と常識と品性の涵養に必要な講義がボランティアで行われており、多くの市民が受講されています。新渡戸稲造の母校の代表として大変光栄に思います。

また、新渡戸の教育精神は、札幌農学校での教育と 7 年間の留学において培われたものであり、北海道大学で教育を受けている学生ボランティアの方々が平成遠友夜学校の運営に携わっていることは、その精神が後輩に引き継がれている証であり、本学の代表としてこの上ない喜びであります。

最後に、今後も平成遠友夜学校の運営が円滑に行われ、新渡戸の教育精神が運営ボランティア及び受講者に引き継がれること祈念いたします。

平成 26 年 9 月 3 日



平成遠友夜学校創設 10 周年記念誌「燈火」  
平成 26 年 11 月 1 日発行

町はずれの学舎で脈打つ熱い血潮 (平成遠友夜学校創設 10 周年記念誌「燈火」から転載)

北海道大学理学部化学科 2 年 平成遠友夜学校教頭 小山田 伸明

自分が理科系の学問を好んできたこと、そして今の実利重視な今の教育制度のせいもあり、人格教育といったものに触れる機会をはめったにありませんでした。そしてそんな無機質な学習環境の中にあつた自分に、学問の意義を考える場をくれたのは平成遠友夜学校でした。

北海道大学に入学してまもなく、初めて足を踏み込んだ遠友学舎ではエコツアーの講演をしていた気がします。講演後の寮歌合唱には多分に面を食らったものですが、胸に熱いものを感じた春の夜でした。それ以来足しげく通ううちに生徒から「教頭」として居つくになっている次第です。

平成遠友夜学校では各講師の専門的な話もち

ろんですが、なんといっても藤田先生の新渡戸稲造と札幌遠友夜学校の話は自分を虜にしました。札幌という寒い土地にきてこんなに胸の熱くなる話が聞けるとは思ってもみませんでした。それからというもの自分は、母にも天にも恥じることのない人間、人格を備えた人間であろうと務めてきたつもりです。殊に本来の札幌遠友夜学校にならって「学習支援」をはじめたのですが、自分の精神も社会への影響もやはり遠く札幌遠友夜学校には及ばないものと思います。人格完成を願い不断の努力を自らに誓うことをもって平成遠友夜学校に感謝の意を示すものとします。

## 北大生「遠友夜学校」の精神継承



学習指導の打ち合わせをする小山田さん(左)ら学生メンバー

学習支援は、北の学生や教員が講師を務める市民講座「平成遠友夜学校」の運営スタッフで北大2年の小山田伸明さん(20)が担当した。平成遠友夜学校の事業の一つとして、開大2~4年の6人がボランティアで参加。毎週火曜日午後6時~9時に開催を予定で、北大構内を借用して高校生の希望や学力に応じて教える。

19日は、開大の参加メンバーが指導法を講義した。北大2年の西田剛さん(19)は「高校時代に勉強の意義に金銭的な負担をかけ、心

### 塾に通えぬ高校生支援

26日から 学力に応じ無料指導

北大の前編である札幌農学校の学生が無償で教員を務めた「遠友夜学校」。同校の精神を受け継ぐと、北大生有志が26日から開大で、経済的な理由で勉強できない高校生を対象に無料の学習支援を始める。今年は夜学校設立100年の節目に当たり、メンバーは「単仕の精神を現代で実践したい」と張り切っている。

「勉強が苦しい。家賃の事情で学びたくてもできない高校生が力になりたい。」小山田さんは「年齢が近い利点を活かして、勉強のほかに進路の相談にも応じたい」と意気込んでいる。

遠友夜学校は1894年(明治27年)、新渡戸稲造が働きながら学べるための私財を投じて、現在の札幌市中央区南4条4に設立した。札幌農学校の学生がボランティアで教員を務め、後に作家となった有島武郎も教壇に立った。授業

無料で、1944年(昭和19年)の開校までに約5千人の生徒を受け入れた。2005年に平成遠友夜学校を設立し、校長を務める藤田正一北大名誉教授(70)は「新渡戸が唱えた『学問より実行』を地でいく動きが学生から生まれて、非常にうれしい」と話している。

学習支援は事前の申し込みが必要。申し込みは電子メール [kyuwaika@u-hokudai.ac.jp](mailto:kyuwaika@u-hokudai.ac.jp) へ。

筆者の小山田さん(写真の左)が紹介された北海道新聞 2004年8月24日

## ポプリコンサート

平成遠友夜学校・図書ボランティア 山岸 博子

風の冷たい晩秋の祝日の11月23日、北大総合博物館では、ステキなポプリコンサートが開催されました。

ポプリコンサートとは、ブリタニカ国際大百科事典のポプリ用語解説によれば、「音楽用語、良く知られている旋律やその断片をつなぎ合わせた曲のこと」・・・だそうです。通常はドライフラワーの用語として知られていますけれど。

このポプリコンサートは、津曲敏郎博物館館長とチェンバロボランティアの新妻美紀さんが、北大交響楽団有志、ヴァイオリンの町田崇さん、チェロの折山徹郎さん・上海一輝さん、オーボエの近藤弦さん、フルートの新里太郎さん・花山優希子さんの応援を得ての、博物館らしい心温まる感動のコンサートでした。

学生時代には北大ギターアンサンブルで活躍したという館長のギター演奏は、その人柄を表わすような優しいなごみの演奏でした。

ご自身で語られていたように、館長が演奏されることは恐らくそうはないことでしょう。さすがは、北大！

北大交響楽団の学生さんの演奏は、とても素晴らしく、それを見守り伴奏される新妻さんのポプラチェンバロの音色も博物館の宝のように感じました。

そして、演奏された曲も、ポプリコンサートとの名のとおり、馴染みの曲ばかりで、学生さんの分かりやすい解説と若さの溢れた演奏が楽しい雰囲気をかもしだしていました。

10年前の台風で倒れたポプラの樹で作ったこのチェンバロは、気温や湿度などに敏感で維持管理がとても大変なのです。この日は小野敏文さんの

調律でとても良い音色で御機嫌の様子でした。

満員の観客（約100名）は、津曲館長の「ポプラチェンバロの維持のための募金を・・・」の呼び掛けに応じ、帰りには募金をする多くの人の姿が見られました。

このポプラチェンバロの作成者の横田さんがチェンバロの調律に来てくださり、12月8日（月曜日）18:00～19:30 北大総合博物館「知の交流コーナー」に於いて、チェンバロに関する講演をしていただきます。ご参加をお待ちしています。



上：左から 折山さん、新里さん、花山さん、新妻さん、津曲館長、町田さん、上海さん、小野さん

下左：演奏中の新妻さん(チェンバロ)と津曲館長(ギター)

下右：近藤さん(オーボエ)

### 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース 第35号

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：石川、沼田、星野、山岸、児玉）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2014年12月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-4706
- ◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>